

PP217131 微小転移観察可能な腹膜播種モデルの確立とTS-1の腹膜播種への有効性の検討

森 琢児, 藤原義之, 矢野雅彦, 田村茂行, 安田卓司, 塩崎 均, 門田守人 (大阪大学大学院病態制御外科)

目的) 進行, 再発胃癌においては, 腹膜転移を有する症例が多い, しかし, 胃癌腹膜播種において肉眼的に観察できない微小な転移が予測されるものの, その定量的評価手段は未だ確立されていない. そこで, 微小転移の観察の可能となった腹膜転移ヌードマウスモデルを用い, 化学療法の有効性を検討する. 方法) ヌードマウスにGFPを導入した胃癌株を腹腔内移植し, 無処置群とTS-1投与群とで比較した. 薬剤の腹膜転移抑制効果判定の評価は, 腹膜転移の有無を肉眼的に, 並びに蛍光顕微鏡下で観察した. また, 生存期間を観察した. 結果) TS-1群において有意差をもってfluorescenceの観察の減少をみとめた. また生存率においてもTS-1群において有意に高い生存率を認めた. まとめ) 1) 微小転移まで評価の可能なヌードマウス腹膜播種モデルを確立した. 2) TS-1の胃癌腹膜播種における有効性が示唆された.

PP217132 胃癌術後に出現した多発性皮膚転移およびリンパ節再発に対してTS-1投与が有効であった1例

大西康晴¹⁾, 山岸文範¹⁾, 田澤賢一¹⁾, 湯口 卓²⁾, 新井英樹¹⁾, 塚田一博²⁾

(¹⁾糸川川総合病院外科, (²⁾富山医科大学第2外科)

【はじめに】胃癌術後に出現した多発性皮膚転移およびリンパ節再発に対し, 新規経口抗がん剤TS-1が有効であった症例を経験したので報告する. 【症例】83歳, 男性. 2000年5月24日, L領域の3型胃癌に対し幽門側胃切除術施行. 術後, 正中創およびドレーン抜去部を中心に多発性硬結が出現. 胃癌の皮膚転移と診断しTS-1 (80mg/day) の投与を開始された. 1クール終了後, CTで転移性皮膚腫瘍の消失がみられ, 下大静脈外側のリンパ節転移が著しく縮小した. 他の皮下硬結も縮小傾向にあった. 2クール終了後, 明らかな副作用は認めず, 2001年2月まで再発の徴候はみられていない. 【まとめ】TS-1は進行再発胃癌に対してきわめて有用であると考えられた.

PP217133 TS-1が奏効し長期生存中の1例

小野秀高, 国崎主税, 秋山浩利, 野村直人, 松田悟郎, 嶋田 紘 (横浜市立大学第2外科)

【目的】再発進行胃癌に対し, TS-1の投与が奏効した症例報告. 【症例】39歳女性, 平成9年3月13日, 胃癌の診断で幽門側胃切除術, D3郭清施行を施行 (LM, Circ, type3, 85x70mm, por2>sig, n1 (15/58), int, INF γ , t3, ly2, v0, stageIIIA, curability B). 術後 low dose MTX-CDDP-5FU療法; MTX 30mg/m², CDDP 15mg/m², 5FU 500mg/m² を6クール施行し, 経口的にフッ化ピリミジン系薬剤を投与したが, 平成11年8月中旬にKrukenberg tumorを認め, 8月24日に卵巣摘出術を施行. 腹水貯留 (classV) と腸骨動脈領域のリンパ節腫大を認め, 癌性腹膜炎及び遠隔リンパ節転移治療の目的でTS-1 (100mg/day) の投与を開始. 現在まで計10クルールの投与で, 腹水貯留はなく腸骨動脈領域のリンパ節は縮小 (PR). 再発から1年6ヶ月経過した現在, 外来通院中. 【結語】TS-1は外来で良好なQOLを維持しながら継続投与が可能で, フッ化ピリミジン系薬剤と併用しても有効であり, 再発胃癌に対して試みられるべき治療法である.

PP217134 術前化学療法としてTS-1/CDDPが奏功した腹部大動脈周囲リンパ節転移陽性胃癌の1例

中村将人, 丸山憲太郎, 丸山尚美, 真貝竜史, 勝本善弘, 中口和則, 古川順康, 岡島志郎, 陶 文暁 (市立吹田市民病院外科)

手術不能胃癌に対し, TS-1/CDDP療法を施行し, 良好な結果が得られたため報告する. 症例は64歳の男性, 腹痛を主訴に当科を紹介受診した. 原発巣はM領域の3型胃癌で, 腹部CT検査にて腹部大動脈周囲に腹腔動脈から大動脈分岐部まで連なる最大約5cmの大小不整, 多数のリンパ節転移を認めた. 根治的手術は困難と判断し, 術前化学療法としてTS-1 120mg/day, 3weeksの経口投与を開始し, Day 8にCDDP 90mgを点滴投与した. 1コース終了時に原発巣は縮小傾向を認め, CT上リンパ節転移は約1cmまで縮小した. 有害事象はgrade1の悪心と味覚異常のみであり, 患者はCDDP投与時以外には外来にてQOLを損なうことなく治療を受けることができた. 現在2コース目施行中であり, その後に手術予定である. 当日は手術結果も併せて供覧する.

PP217135 TS-1の2週投与1週休薬法が著効した胃癌肝転移の1症例

土居貞幸, 柳沢 哲, 間狩洋一, 田中伸生, 直井正紀, 丸山博英 (市立川西病院)

症例は68歳, 男性. 1999年4月, リンパ節転移を伴う3型胃癌に対し根治度Bの幽門側胃切除術を行った. 経過観察中, 術後12ヶ月目に肝S6に径3cmの転移を認めた. 5-DFUR 800mg/dayを投与したが4週間後grade3の下痢が出現し, かつNCのため5-DFURの投与を中止し TS-1 80mg/day, 分2の経口投与を開始. 2週間連日投与後1週休薬した. これを1クールとして投与を繰り返した. 3クール終了後にはCRとなり, 2001年1月現在12クール終了したがなんら再発の徴候を認めていない.

【考察】TS-1の14日間連続投与7日間休薬を1クールとする方法はdose intensityを保ちながら副作用を軽減し得るTS-1投与の一方法と考える.

PP217136 高度進行胃癌に対するlow dose-CDDP/TS-1併用療法-neoadjuvant chemotherapyとしての有用性

岩橋 誠, 中森幹人, 山上裕機, 谷 眞至, 中村公紀, 上田健太郎, 永井祐吾, 谷村 弘

(和歌山県立医科大学第2外科)

目的: 高度進行胃癌症例に対しlow dose-CDDP/TS-1併用療法を施行しその有用性を検討した. 方法: TS-1 120 mg/dayを4週間連続とCDDP 3~5 mg/bodyを5投2休で4週間投与を1クールとした. 症例1: 胃角部3型. 著明なリンパ節腫大を認め, 根治切除困難と判断し, 本法を2クール施行した. 症例2: 胃体部3型. 著明な腹腔内リンパ節腫大と腰椎転移を認め, 切除不能と判断し, 本法を3クール施行した. 結果: 症例1: 原発巣, リンパ節とも著明に縮小し, 手術を施行した. 病理組織では腫瘍の残存を認めず, CRと判定した. 症例2: 1クール終了後, リンパ節は著明に縮小しPRと判定した. 3クール目に頸椎多発転移が確認され治療を中止した. 結語: 本法は高度進行胃癌の術前化学療法として有用である.

PP217137 再発および非治癒切除胃癌に対するTS-1治療

河田 聡, 高橋昌宏, 後藤幹裕, 下国達志, 野村 克, 赤羽弘充, 稲垣光裕, 中野詩朗, 濱田朋倫

(JA北海道厚生連旭川厚生病院外科)

【目的】再発および非治癒切除の胃癌を対象にフッ化ピリミジン系抗がん剤TS-1の有効性, 安全性について検討した. 【対象】TS-1を投与した26例を対象とした. 男性19例, 女性7例, 年齢は49歳から74歳であった. 再発17例, 非治癒切除11例でPSは0が16例, 1が8例, 2が2例であった. 【結果】投与期間は2コース未満10例, 2コース以上16例であった. 最長投与は11コースである. 投薬中止理由は患者意思2例, 副作用1例, 病期進行7例であった. 評価可能病変を有し2コース以上施行した15例の奏効率は, CR1例, PR3例奏効率26.6%であった. 副作用は白血球減少2例, 食思不振5例, 下痢6例, 口内炎5例, 皮膚疾患11例, 全身倦怠感7例であった. 転帰は癌死が6例, 消化管出血, 腹膜炎による死亡が各1例であった. 【まとめ】再発および非治癒切除胃癌に対するTS-1治療は, 奏効率26.6%副作用はgrade2以下であり, 患者QOLを保ちながら施行可能な抗がん剤治療と考えられた.

PP217138 ヌードマウス可移植性ヒト胃癌株におけるタキソテール併用療法の基礎的検討

金森規明, 藤井雅志, 笠倉雄一, 望月文朗, 東風 貢, 常田 裕, 相崎一雄, 笠原三津子, 海賀照夫, 高橋 亨, 小林美智代

(日本大学第3外科学教室)

【目的】マウス可移植性ヒト胃癌株を用いてTXT併用療法につき基礎的検討を行った. 【方法】マウス皮下に胃癌株を移植, 各群5匹のマウスを用いて, 以下の薬剤投与群を設定した. A群: 5FU 60mg/kg, 4日毎3回腹腔内投与. B群: CDDP 8mg/kg, 単回腹腔内投与. C群: TXT 8mg/kg, 単回腹腔内投与. D群: CDDP 5.6mg/kg, 単回腹腔内投与. E群: CDDP 5.6mg/kg, 単回腹腔内投与. F群: 対照. 効果判定は推定腫瘍重量を算出, 更に腫瘍抑制率 (IR) を算出した. また薬剤投与終了後腫瘍を摘出し病理組織標本を製し組織学的効果を判定した. 一方副作用については各群マウスの平均体重を計測した. 【成績】E群のIRは23.2%で最も抗腫瘍効果が得られた. 【結論】胃癌におけるTXTおよびTXTを用いた併用療法の有用性が示唆された.